

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 15 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23330059

研究課題名(和文)「冷戦」と「非冷戦」の境界—新たな冷戦観の構築に向けて

研究課題名(英文)Boundaries of the Cold War - towards a new perspective

研究代表者

益田 実(MASUDA, MINORU)

立命館大学・国際関係学部・教授

研究者番号：40262985

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 14,300,000円、(間接経費) 4,290,000円

研究成果の概要(和文)：従来の冷戦史研究では、冷戦期国際関係上の事象の「どこまでが冷戦でありどこからが冷戦ではないのか」という点につき厳密な検証が不十分であった。それに対し本研究では、「冷戦」と「非冷戦」の境界を明確にし、「冷戦が20世紀後半の国際関係の中でどこまで支配的事象であったのか」を検討し、より厳密な冷戦史・冷戦観を確立することを目的に、冷戦体制が確立した50年代半ばから公文書類の利用が可能な70年代後半までを対象とし、冷戦との関連性に応じて8つの事象を三分類し、関係諸国公文書類を一次史料として「冷戦」と「非冷戦」の境界を実証的に分析した。

研究成果の概要(英文)：In the study of the history of the Cold War, the distinction between what is Cold War and what is not has not been quite clear. There has been a tendency to treat the Cold War as a given factor or a background picture of the post-war international history and there has never been a conscious and serious attempt at drawing a line of demarcation between what constituted the Cold War and other post-war development in the international society which could have happened quite independent of the Cold War. In this research we have aimed at establishing a clear borderline between the Cold War and the non-Cold War, and by doing so, we have tried to examine how dominant a factor was the Cold War in the international relations during the latter half of the 20th Century. Specifically, we have chose 8 subjects as examples. They have been chosen from the period between the mid 1940s to the early 1980s.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：政治学・国際関係論

キーワード：冷戦史 国際史 外交史 同盟外交 脱植民地化 文化変容

1. 研究開始当初の背景

(1) 近年新たな視点を掲げる研究は現れ始めているが、20世紀後半の国際関係史全体における冷戦の位置づけは、今なお多くの未検討領域を残している。国内では田中孝彦(『冷戦史の再検討』『国際政治』134号(2003), 1-8頁)が早期に、冷戦の「中心」、「周辺」、「社会・文化の次元」の三側面からの冷戦史の「総合化」を提唱し、近年では、菅英輝編著『冷戦史の再検討-変容する秩序と冷戦の終焉』(法政大学出版局, 2010)が、アメリカの冷戦秩序構想、西側同盟国内関係、東アジア冷戦秩序の変容といった事例を対象に多角的実証研究を集成している。しかし上記いずれにおいても、「何が冷戦であり何が冷戦でないのか」という観点からの問いかけは不在であり、「冷戦」と「非冷戦」の境界は、漠然としたままである。

(2) 国外においては Odd Arne Westad が新しい冷戦史研究のパラダイムとして、イデオロギー・技術・第三世界の三つを指摘し('The New International History of the Cold War: Three (Possible) Paradigms', *Diplomatic History*, Vol. 24, No. 4 (Fall 2000), pp. 551-565)、大著 *The Global Cold War* (Cambridge University Press, 2005)において、冷戦を背景とした米ソの第三世界への介入がグローバルな国際関係をいかに形作ったかを明らかにしようとした。研究代表者は研究分担者中4名とともに同書を分担翻訳し、『グローバル冷戦史』(名大出版会, 2010)として公刊したが、同書でも冷戦の存在は与件として語られ、その境界は極めて曖昧である。(Westad は冷戦を「米ソ間のグローバルな対立が国際情勢を支配した状況を意味し、おおむね 1945年から 1991年までをさす(邦訳 4頁)と簡潔に定義している。Westad が Melvyn Leffler と共編した *The Cambridge History of the Cold War*, vols. 1, 2 & 3 (Cambridge University Press, 2010)においても、冷戦は "the epoch when a global rivalry between the United States and the Soviet Union dominated international affairs" (p. xv.) とのみ簡潔に表現されている。)

(3) 上掲の Westad 著書及び編書は、超大国と主要同盟国の関係、新興国・途上国や技術・文化の役割など、冷戦史の領域を最大限に拡張した試みであるが、大きく広がった視点のため、「冷戦=20世紀後半の国際関係史の全て」であるかの如き印象すら与える。あるいはそれは正しい認識かも知れないが、冷戦に先行する事例、境界的な事例、典型的(中心的)な事例の全てを視野に入れながら、それらのどこまでが「冷戦」と呼べるのか検証せずに自明とすることはできない。本研究はこうした問題意識に基づき、アメリカ及びその主要西側同盟諸国さらには東西両陣営の辺縁に位置した国までを視野に入れ、冷戦研究の枠内にとどまる冷戦史の再検討を超え、

戦後国際関係史再検討の一環として冷戦の位置づけの確定を目指すものとして着想された。

2. 研究の目的

(1) 本研究参加者は、冷戦期アメリカ外交を研究してきた青野、西側同盟国の冷戦秩序変容への関与を研究してきた齋藤・山本・妹尾、帝国解体と欧州統合を背景とするイギリス外交変容を研究してきた橋口・益田・小川、中国を対象に冷戦期非超大国の独自外交を研究してきた三宅からなる。このうち三須・山本・益田・小川・三宅は、2008年より『グローバル冷戦史』翻訳作業を共同して分担した。同書の著者 Westad は、超大国による第三世界への介入は形を変えた帝国主義の継続である、との視点を提示し、米ソは各々「自由」と「公正」の理念の下に西洋近代の世界規模の拡散を図ったと論じた。しかし彼の視点は超大国と第三世界に集中しており、超大国の主要同盟国による自律的行動の冷戦における役割は、ほぼ無視されている。この点に疑問を持ち非超大国アクターの自律的行動と冷戦との関わりを検討しようとする中で浮上したのが、既存の冷戦史研究における「冷戦」と「非冷戦」を分つ基準の曖昧さという問題であり、この点を明確にしなければ冷戦史の適切な再検討は困難である、という着想であった。

(2) そのため本研究では、冷戦との関係性についての一般的な評価に応じて三つのカテゴリーを設定し、それぞれ複数の事例を分析し、「冷戦」と「非冷戦」の境界を明らかにすることを目的とした。対象とする時期は、ヨーロッパの東西分裂に起源を持つ冷戦が、東アジア、東南アジア、中東へとグローバルな形で拡散し、経済・軍事・政治といった各分野での冷戦体制も確立した 50年代半ばから、関係諸国公文書類が部分的に公開され一次史料に基づく実証的記述が可能な、70年代後半までの時期とした。三つのカテゴリーはそれぞれ以下の形で設定した：

冷戦に先行する起源を持ち冷戦と並行して進展した事象が、どこまで冷戦に影響され、どこまで冷戦から独立していたかを明らかにする。事例としては、帝国からコモンウェルスへの再編と欧州統合への接近及び、国際経済秩序再編に関わるイギリス外交を選ぶ。

冷戦期に生起したが全面的に冷戦の一部と見なし難い境界的事象において東西対立の論理がどこまで支配的要因であったかを明らかにする。事例としては、東西貿易、東方外交への他の西側諸国の対応、西側表象文化の東側及び第三世界での受容、中国の国交樹立外交を選ぶ。

アメリカが直接関与し冷戦を体現する中心的な事例が、どこまで排他的に冷戦に由来する事象であったかを明らかにする。事例としてはキューバ危機、コンゴ動乱を選ぶ。以上の作業を通じて本研究は、冷戦と一括さ

れる事象を整理分類し、「冷戦」と「非冷戦」の境界を定める一定の基準を明らかにすることを目的とした。

(3)「冷戦と非冷戦の境界はどこにあるのか?」という問いかけの不在は、「同時代人の行動を支配した認識枠組としての冷戦」と、「学術的分析対象としての冷戦」の区分が曖昧なまま放置されていることを意味する。両者を切り分け、戦後国際関係史上の事象としてのより厳密な冷戦の位置づけを目指す点に、本研究の特色・独創性がある。また従来の冷戦史研究は、暗黙裡に単一の歴史的事象としての冷戦の存在を前提としている。しかし冷戦は、政治軍事経済の闘争、同盟内の摩擦、反植民地革命と介入など、様々な対立の集合に、半ば即興的に与えられたラベルと考えるべきである。本研究から予想される結果は、この雑然とした集合の構成要素を明確にし、「冷戦」と「非冷戦」を区分する基準を示すことである。この基準の提示を通じて、国際関係を一様に覆う同時代的ラベルとしての冷戦観から、多様な対立の集合体としての冷戦観へと認識の移行を促し、無自覚に冷戦史に包含されてきた諸事例においても、その「冷戦性」の有無と程度の検証を可能にする点に、本研究の意義がある。

3. 研究の方法

(1)本研究は、研究組織内に、「先行・並行事例担当班」、「境界事例担当班」、「中心事例担当班」の3つの作業班と1つの「整理統括担当班」を設置し、各作業班による関係諸国・機関のアーカイブで史料の閲覧収集、整理分類とそれに基づく二次的歴史記述の作成を行うことによって遂行した。研究代表者と研究分担者は以下の分担に基づき、対象とする事例の実証的分析に必要な一次史料を、関係諸国公文書館に赴き収集整理し、二次的な分析作業を遂行した。

(2)「先行・並行事例担当班」:冷戦に先行する起源を持ち冷戦と並行して進展した事象が、どこまで冷戦に影響され、どこまで冷戦から独立していたかを明らかにする事例として、国際経済史・欧州統合史・帝国史に焦点を当て以下の3つの事例を担当した。

研究代表者益田実は1960年代から70年代初めの欧州統合進展及びブレトンウッズ体制変容をめぐる英米関係を分析し、冷戦を背景に進展しながら冷戦と独立して語られることの多い欧州統合・国際経済秩序の変容と冷戦の関係を明らかにすることを試みた。

研究分担者小川浩之は、1960年代後半～70年代前半の、イギリス政府の対南アフリカ武器輸出問題への対応を分析し、冷戦秩序の登場に先行して存在した、帝国主義国際分割体制の残滓であるイギリス＝コモンウェルス関係の変容と冷戦の関係を明らかにすることを試みた。

研究分担者橋口豊は、1940年代半ばから1950年代はじめにかけての、イギリス政府の

原爆開発決定過程を分析し、戦時同盟下で開始され、米ソ冷戦に先行し、英米間での対立も内包した核開発問題と冷戦の論理の関係を明らかにすることを試みた。

(3)「境界事例担当班」:冷戦史の一部と認識されいながら実は「境界的」領域に及ぶ事象が、どこまで東西対立の論理に由来するかを明らかにする事例として、以下の4つを担当する。空間的・政策分野的により多様な領域にまたがる事例を含むので、4名体制とした。

研究分担者山本健は、グローバル化の幕開け期である1970年代を中心に、東西貿易をめぐるヨーロッパ諸国間の政治経済関係を分析することにより、グローバル化の力学に基づく秩序と冷戦秩序の境界を明らかにすることを試みた。

研究分担者妹尾哲志は、1960年代から70年代の西ドイツ東方外交をめぐる独米関係を分析し、主要同盟国が、ヨーロッパの地域秩序形成に関し、どこまで冷戦を背景にした対米関係と独立して対応したかを明らかにすることを試みた。

研究分担者齋藤嘉臣は、1950年代から60年代の表象文化における、西側文化の東側および第三世界への普及と拡散、それに対する東側陣営の反応という事例を分析し、冷戦の論理を背景にした文化発信の権力性の解明と、周辺国における反応と冷戦の論理との関係性を、明らかにすることを試みた。

研究分担者三宅康之は、1950年代から60年代の中国の「国交樹立外交」を分析し、東西間の均衡を揺るがす変動要因となった中国外交の中でも、国際舞台における自国の位置づけという基本戦略に関わる問題が、対米・対ソ関係という冷戦の論理にどこまで支配されていたかを明らかにすることを試みた。

(4)「中心事例担当班」:アメリカが直接関与し冷戦を体現する中心事例において、冷戦の論理はどこまで排他的な決定要因であったのかを明らかにするため、以下の2つを担当した。

研究分担者青野利彦は、キューバ危機におけるアメリカ及び西側同盟諸国の政策を分析し、これら諸国の対応が、どこまでグローバルな東西対立によって規定され、どこまでそれとは独立した歴史的・国際的文脈によって規定されたかを明らかにすることを試みた。

研究分担者三須拓也は、60年代のコンゴ動乱へのアメリカの関与を分析し、超大国による第三世界への介入という事象が、どこまで東西対立とは独立した起源を持つものであったことを明らかにすることを試みた。

(5)上記分担に基づき、各担当班はそれぞれ以下の史料収集作業を行った。

「先行・並行事例担当班」は、益田が英国立公文書館にて60～70年代の通貨問題とEEC加盟問題関連文書を、小川が英国立公文書館

及びコモンウェルス事務局にて 70 年代初めの対南アフリカ武器輸出関連の首相府・外務省・コモンウェルス事務局文書を、橋口が、英国立公文書館にて原爆開発問題関係文書を閲覧収集した。

「境界事例担当班」は、山本がフランス外務省史料館にて 70 年代後半の東西欧州関係に関わるソ連・東欧諸国関連文書を、妹尾が独外交史料館及び独連邦文書館にてブランド政権期の東方外交関連文書を、齋藤が英国立公文書館にて広報文化政策関連文書を、三宅が中華人民共和国外交部公文書館（北京）及び中央研究院近代史研究所公文書館（台北）にて国交樹立外交関連文書を、閲覧収集した。

「中心事例担当班」は、青野がケネディ大統領図書館及び米国立公文書館にて 61～62 年のホワイトハウス・国務省のキューバ政策関連文書を、三須がジョンソン大統領図書館にて 63～68 年の国務次官ジョージ・ポール関連文書を、閲覧収集した。

(6) 研究代表者、研究分担者ともに上記史料群の収集後、文書の詳細な整理作業を行い、文書内容に即した複数の文書群への分類とその時系列的整理を行い、二次的な歴史記述へと発展させる作業を行った。

4. 研究成果

(1) 研究の主な成果：本研究では「冷戦」と「非冷戦」の境界を明確にし、冷戦が 20 世紀後半の国際関係でどこまで支配的事象であったかを検討することにより、冷戦が本質的にいかなる歴史の意味を持つ事象だったのかを明らかにすることを試みた。より具体的には、冷戦に先行する起源を持ち冷戦と並行して進展した事象、冷戦期に生じたが全面的に冷戦の一部と見なし難い境界的事象、アメリカが直接関与し冷戦を体現する中心的事象の三カテゴリーから事例を抽出し、それぞれの事例と、冷戦との相対的な「距離」を計測することで、それらがどこまで冷戦から独立していたかを明らかにした。これまでの作業過程で得られた成果は、冷戦の論理が、固有の歴史的経緯にしたがって生じた多様な歴史的変動に対し、それぞれ独自の形で影響を及ぼすという理解である。したがって今後冷戦の本質を理解していく上で必要な作業は、冷戦との相対的な「距離」の異なる事例間での比較を超え、同時代に存在しながら、それぞれ固有の経緯を有する中長期的な歴史的変動に属する事例間で、冷戦の影響を比較することであると認識が得られた。

(2) 得られた成果の国内外における位置づけとインパクト：本研究開始時点ですでに上掲 Westad & Leffler (eds), *The Cambridge History of the Cold War* が刊行されていたがその後 2013 年までに R. Immerman & P. Goedde (eds), *The Oxford Handbook of the Cold War* (Oxford University Press, 2013)

および S. Casey (ed.), *The Cold War* (Routledge, 2013) といった既存の冷戦史研究を集大成し新たな展望を開くことを目指す大型の研究文献が刊行されている。ほぼ同時にこれらの著作群が出現する事自体、「始まり」と「終わり」のある出来事となった冷戦の「通史」が求められていることを示している。とはいえ、これらの著作群が大量の研究者を動員し、膨大な分量で提示されねばならなかったということは、冷戦がその終焉から 20 年以上を経てもなお、本質的にいかなる歴史の意味を持つ事象だったのか定かでないことを物語っている。本研究のこれまでの成果も同様に、新たな通史的冷戦史記述のために必要な冷戦史認識のパラダイムの必要性を明らかにするという効果を持つものである。

(3) 今後の展望：代表者・分担者の一部は、主要欧米諸国の政治的経験を近代世界の長期的変容の中に位置づける通史記述の試みも行っており、冷戦が存在した 1940 年代半ばから 1990 年代初頭の時期に世界が経験した「大きな物語」は、二度の大戦を経て近代国際社会を形成した主要国民国家間の権力とイデオロギーをめぐる政治、脱植民地化による世界地図の根本的変容、産業化の果てに生じた社会・文化の急速な変容の三つであるという理解を得ている。その結果、一定のパラダイムに基づく通史として新しい冷戦史を構築するためには、次の作業が必要であるとの仮説を構築するに至っている。それはすなわち、(1) 東西関係をめぐる西側陣営内の同盟政治の有り様、(2) 脱植民地化過程の具体的な発現形態、(3) 高度産業化社会が経験した文化的変容、の三領域において複数事例を抽出し、冷戦はいかなる影響を与えたのかを分析することである。この仮説を実証すべく本研究を発展させた新たに研究組織を拡大し 2014 年度～2017 年度（予定）の新たな基盤研究 (B) 交付課題「同盟政治・脱植民地化・文化的変容 三つの軸から捉え直す新しい冷戦史」(研究課題番号：26285042) に取り組み始めている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 9 件)

三須 拓也、コンゴ国連軍の武力行使を巡る国際政治とアメリカ政治(1961 年 8 月～6 年 12 月)、札幌大学経済と経営、44 巻 1・2 号、査読無、2014、43-76

DOI: なし

Tetsuji Senoo, A small step toward a 'German Europe'? Germany, the Ostpolitik and Europe, Challenge of the 21st Century and the Region、査読無、1 巻、2013、73-79

DOI: なし

山本 健、「ヨーロッパの年」と日本外交、1973-74 年 外交の多元化の模索と日米欧関係、NUCB Journal of Economics and Information Science、査読無、57 巻 2 号、2013、147-181

DOI：なし

益田 実、冷戦史の転機、冷戦史研究の転機 ヨーロッパ・デタント研究の成果と可能性、国際政治、査読無、170 号、2012、171-180

DOI：なし

〔学会発表〕(計 10 件)

山本 健、二重のポーランド危機と西側諸国、1980-81 年、日本国際政治学会、2012 年 10 月 20 日、名古屋国際会議場

三宅 康之、中国的《建交外交》(1949-57)、中国当代史研究工作坊(第一屆)、2012 年 07 月 29 日、華東師範大学(中国上海市)

妹尾哲志、プラント政権の東方政策と独米関係、1969~1972 年、日本国際政治学会、2011 年 11 月 13 日、つくば国際会議場

〔図書〕(計 8 件)

齋藤 嘉臣、勁草書房、文化浸透の冷戦史：戦後ヨーロッパにおけるイギリスのプロパガンダと劇場性、2013、359

益田 実・小川 浩之(編著)、ミネルヴァ書房、欧米政治外交史 1871~2012、2013、25(201- 225)、335

小川 浩之、中央公論新社、英連邦 王冠への忠誠と自由な連合、2012、319

三宅 康之、東京大学出版会、高原 明生・服部 龍二編著、日中関係史 1972-2012 I 政治、第 8 章六・四(第二次天安門)事件一九八九-九一年、2012、30(229-258)

妹尾 哲志、晃洋書房、戦後西ドイツ外交の分水嶺 東方政策と分断克服の戦略、1963~1975 年、2011、296

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

益田 実(MASUDA, Minoru)

立命館大学・国際関係学部・教授

研究者番号：4 0 2 6 2 9 8 5

(2) 研究分担者

齋藤 嘉臣(SAITO, Yoshiomi)

京都大学・大学院人間・環境学研究科・准教授

研究者番号：1 0 4 0 2 9 5 0

橋口 豊(HASHIGUCHI, Yutaka)

龍谷大学・法学部・教授

研究者番号：2 0 2 8 3 3 8 5

青野 利彦(AONO, Toshihiko)

一橋大学・大学院法学研究科・准教授

研究者番号：4 0 5 0 7 9 9 3

三宅 康之(MIYAKE, Yasuyuki)

関西学院大学・国際学部・教授

研究者番号：5 0 3 6 3 9 0 8

妹尾 哲志(SENOO, Tetsuji)

専修大学・法学部・准教授

研究者番号：5 0 5 8 0 7 7 6

小川 浩之(OGAWA, Hiroyuki)

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授

研究者番号：6 0 3 6 2 5 5 5

三須 拓也(MISU, Takuya)

札幌大学・地域共創学群・教授

研究者番号：7 0 4 0 5 6 2 9

山本 健(YAMAMOTO, Takeshi)

西南学院大学・法学部・准教授

研究者番号：7 0 5 0 9 8 7 7

(3) 連携研究者

なし